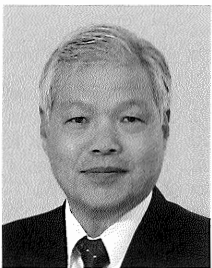


愛知淑徳学園校歌

学園理事長 小林素文



らでした。

【愛知淑徳学園校歌】は毎年歌い歌詞も語んじていますが、その意味は漠とした情景としてとらえているだけなので、その意とするところを歌人であり万葉研究家である愛知淑徳大学の島田学長に尋ねてみました。すると「さざれ石」と同じような取り違えをしていることに気づきました。

一 大和国の 倅を集めし

たいらけき 濃尾の里よ

白鳥の典雅装い

乙女子は いまし佇む

淑徳よ心の誉

永遠に名をば拳げかし

二 遠つ浪 胸にたたえし

日輪を 仰ぐ日頃よ

新しき 知恵を探りて

臆吾は真理極めん

淑徳よ 香りゆたかに

永遠に 花咲かせかし

三 みかえりの 森をとよもし

風わたり 歌声流る

燈は 高くかかげき

いにしえと 遠く行く道

淑徳よ 母のごとくに

永遠に 吾を呼べかし

二番の「たたえし」とは「いっぱい満たす」ことで「日輪」にかかっており、「遠つ浪胸にたたえし日輪」とは「遠

く(地上に届く光の)波を体いっぱい満たしている太陽の意。三番の「とよもし」とは「鳴り響かせる」ことで「風」にかかっており、「みかえりの森をとよもし風」とは「振り返り見る森を鳴り響かせている風」の意であることを知り、私の思いもこめて通釈してみました。

- 一 日本の実り豊かな濃尾の里に
気高く清らかな白鳥のごとき乙女たちが
この今を侍んでいる
淑徳は心の誉
永遠に光輝いていておくれ
遠く地上に波のごとく届く
光に満ちた太陽を仰ぐ日々よ
新しき知恵を探り真実の光を私は求めていく
淑徳よ香りゆたかに
永遠に花を咲かせていておくれ
三 ふりかえると森を響かせる風にのり
歌声が流れている
ともしびを高くかかげて、
いにしえとともに旅立っていこう
淑徳よ母のごとくに
永遠に私を見守っていておくれ

- 五、 勅語(奉読)
- 六、 唱歌(勅語奉答)
- 七、 卒業証書授与
- 八、 校主式辞
- 九、 校長訓示
- 十、 監督官告辞
- 十一、 卒業生答辞
- 十二、 唱歌(別れの歌)
- 十三、 在校生送辞
- 十四、 唱歌(祝いの歌)
- 十五、 一同退場

明治及び大正初期には淑徳独自の歌がなく、卒業式では唱歌が歌われていたのです。ちなみにこの時歌われた『唱歌(別れの歌)』にはいかにも明治の雰囲気を感じられます。

をしむかいなき、こたびの別れ
さらばや、師の君
さらばや、師の君
年月永く、うけし恩
いづれの、時にか、忘れむ。

淑徳独自の歌が歌われるようになったのは第一回創立記

あらためて素晴らしい歌だと実感したこの校歌は、昭和三〇年愛知淑徳学園創立五十周年の折に作成されました。本校国語教員小林修氏による古典の趣のある気高い歌詞に、当時新進気鋭の作曲家柳原徳蔵氏による格調高いメロディーがよくマッチし、以来六五年にわたり歌い継がれてきました。

学園創立百周年記念コンサートで、名古屋フィルハーモニーにより、チャイコフスキーの交響曲に続きこの校歌が演奏されると、会場から嘆声がかれ、涙をぬぐう姿もみられました。それほど卒業生や旧教職員にとつてなつかしく、かけがいのない校歌の演奏により、会場に一体感が生まれたことが昨日のこのように思い出されます。

現在の校歌の前には、どのような歌がうたわれていたのでしょうか。

今から百二十年前の明治四十二年に挙行された愛知淑徳高等女学校第一回卒業式の式次第は『創立六十周年記念愛知淑徳学園史』(以下この資料)によると次です。

- 一、 生徒及職員入場
- 二、 父兄及来賓入場
- 三、 監督官入場
- 四、 唱歌(君が代)

念運動会からです。

淑徳は明治三十九年五月一七日に高等女学校として文部省より認可を受けた日を創立記念日として毎年祝っています。大正五年からその日に運動会をするようになりました。今の体育祭の始まりです。その時の様子は次です。

いよいよ時間がきて、鈴の響きとともに開会され、一同敬礼のあと、校長先生の開会の辞があり、全体で「たのし、うれし、たのし、見渡す限り若葉おどる……」と運動会の歌をうたい……運動会はずづけて行われた

その運動会の歌が次です。

たのし うれし たのし
見渡すかぎり 若葉躍る
なつかしき初夏や
若き日の よろこびを
吹きてぞ薫よ 緑の風そよそよと
おもへば今日こそ わが淑徳の
うまれいでし 記念の日なり
いざやうたへ 声はりあげて
こころからなる よろこびを

この頃『天津光』という歌も作られました。ちなみに「天津光」とは「天の光」、太陽のことです。

天津光と 照りきそう
黄金の鯉のくもりなき
名も中京の東新町
たてるいらかわ わが母校
冷たき地に生ひ出づる
醜の草にも花はあり
ひたはげみなば 小女子の
わざのいかでか むなしかる
大和心の桜花
いさぎよきをば かがみとし
忠と孝との二すぢに
心つなぎて つとめなむ

この『天津光』を正式な校歌にする動きもあつたようですが、昭和三年に学校が東新町から池下へと移転したため、歌詞があわなくなり、立ち消えとなりました。

*

淑徳が池下に移転して三年後の昭和六年に、後に第二代校長となる小林竜二郎作詞、須田昌平作曲の『吾等の淑徳』が作られました。

一 学びの道よ いざいざ進まん
心よ身体よ いざいざ鍛えん
希望と歡喜に燃え立つ吾等
胸に秘めたる美わしの魂
淑徳 淑徳 吾等のこころ
淑徳 淑徳 吾等のこころよ
二 若き乙女の 血潮よ高鳴れ
眞実の光よ いざいざ輝け
理想と意気に溢るる吾等
古き御代より伝わる操
淑徳 淑徳 吾等のさげび
淑徳 淑徳 吾等のさげびよ

『吾等の淑徳』は応援歌でしたが様々な場面で歌われ、校歌に準ずる役割を果たし、昭和三〇年に現在の校歌が作成されるまで二五年にわたり歌い継がれました。

昭和三〇年までの卒業生にとっては『吾等の淑徳』が心の故郷となる歌で、きつと今も諳んじておられることでしょう。

校歌まだ歌えるふしぎ秋夕焼（渡邊禎子）